プロ野球選手の戦争史

－１２２名の戦場記録　山際　康之 著　ちくま新書

須田　章七郎

私たち 70 歳代にとっては遊びが草野球で、ちょっとした空き地があれば近所の子たちと一緒に夕暮れまで遊んでいた。テレビは巨人戦ばかりで、必然的に巨人ファンが大勢を占めていたが、私は阪神タイガースの村山実投手（故人）が好きで、以来熱狂的な虎キチを自認している。そのプロ野球がどのようにして誕生し、その黎明期にはどんな出来事があったのか、本のタイトルが示すように選手をとおして戦争の歴史を知ることができる。登場する人物は戦前のプロ野球球団に所属していた104名に大学や甲子園に出場するなどしたアマチュア出身 18 名（戦後プロに所属した選手を含む）を加えた 122 名で、選手の数だけ戦争の記憶があり、幾多の悲劇が語られている。

2･26事件の直前に誕生したプロ野球

プロ野球（日本職業野球連盟）が誕生したのは 1936 年（昭和 11 年）2 月 5 日であった。その 3 週間後に軍部が台頭していくきっかけとなった 2・26 事件が起きる。雪で白一色となった朝、バスに乗っていた島秀之助（金鯱軍選手）は三宅坂で 2・26 事件に遭遇する。銃を構えた兵隊たちによってバスから降ろされる。翌日、新聞を読みながら、社会を揺るがすあの現場にいたことを知ると体の震えが止まらなくなった。そして不安に襲われ、はたしてこの国は大丈夫だろうか。このまま本当に野球を続けていけるのだろうかと述懐している。

島秀之助: 金鯱軍、法政大卒、金鯱軍発足時に選手兼助監督として入団し盗塁王になる。肩を痛めて審判に転向。戦後も天覧試合など数々の審判を行う。殿堂入り。

職業野球の誕生は 1931 年（昭和 6 年）と 1934 年（昭和 9 年）に開催された日米野球の開催をきっかけに具体化された。とりわけ昭和 9 年の大会ではベーブ・ルースやルー・ゲーリッグが来日し、熱狂する人々でどこの球場も満員になった。日本は 1 勝もできなかったが、京都商業を中退してきた弱冠 17 歳の沢村栄治が大男たちを相手に投げ込んだ球は圧巻だった。

主催した読売新聞社は、このことで購読者数の増加につながり、社長の正力松太郎は新しい事業の勝機とみて、株式会社大日本東京野球倶楽部を興した。日米大会に参加した選手を中心にチームを編成して米国へ武者修行に送り出した。チームは遠征の過程でトウキョウ・ジャイアンツという名称になり、読売の紙面では東京巨人軍と呼ぶようになった。正力は単独のチームの興業では限界もあり、技術力の向上も見込みがないと考え、複数の球団が参加する職業野球リーグの設立に向けて同業の新聞社や鉄道会社に働きかけた。その結果、阪神電鉄はタイガース、阪急電鉄は阪急軍を作り専用球場の建設を急いだ。名古屋では新愛知新聞が名古屋軍、名古屋新聞が金鯱軍を立ち上げた。この他、大東京軍と東京セネタースが名乗りをあげた。こうして昭和 11 年 2 月 5 日を迎え、それから 3 週間後に 2・26 事件を迎えることになる。

2・26 事件当日にセネタースと選手契約した選手がいた。明治大学を中退した野口明だ。

野口明: 明治大を中退してセネタース入団。球界のエースとして活躍するも徴兵され、砲兵として大別山の戦闘に参加。除隊するも再徴兵され、九州で終戦を迎える。

沢村栄治は屋久島沖で戦死

野球好きなら沢村栄治を知らない人はいない。伝説の沢村栄治は職業野球発足時から大活躍で、昭和 12 年は 24 勝 4 敗、防御率は 0.81 で、最優秀選手賞を獲得した。その表彰式が今の東京都江東区にあった洲崎球場で行われた。

正力松太郎は、新聞の購読者を増やすには「戦争とか大きな突発事件がなければ駄目なんだ」と力説していた。その言葉どおり読売新聞の紙面は「北支事変！皇軍意気揚がる」「物凄し皇軍の威力」といった勇ましい見出しで読者を煽った。さらに全国民が一致協力して現地の皇軍を支援する、として読売新聞社は国防献金を募った。職業野球連盟も何もしないわけにもいかず、昭和12年7月18日、洲崎球場で国防費献納東西対抗職業野球戦を開催した。この試合の合間に先の沢村栄治の表彰式が行われた。なんと沢村はこの2日後に三重県で徴兵検査を受けている。身長五尺七寸五分（約174.2cm）体重十八貫（67.5kg）の甲種合格であった。文部省の調査では、この年の 20 歳の平均身長は約 162.5cm、体重は55.5kgだった。表彰式の11日前の7月7日には盧溝橋事件が起きていた。

沢村栄治：巨人軍。徴兵され武漢攻略などに参加。日米開戦時は比島に上陸し従軍する。兵役生活の中で肩をこわし、豪腕を失った。3 度目の召集でフィリピン防衛戦のため輸送船に乗り込んだが屋久島沖で米軍潜水艦に撃沈され戦死。その名は沢村賞として刻まれている。殿堂入り。

選手の中で最初の戦死者となったのは名古屋軍にいた後藤正。北支ではセネタースの中尾長が戦死している。

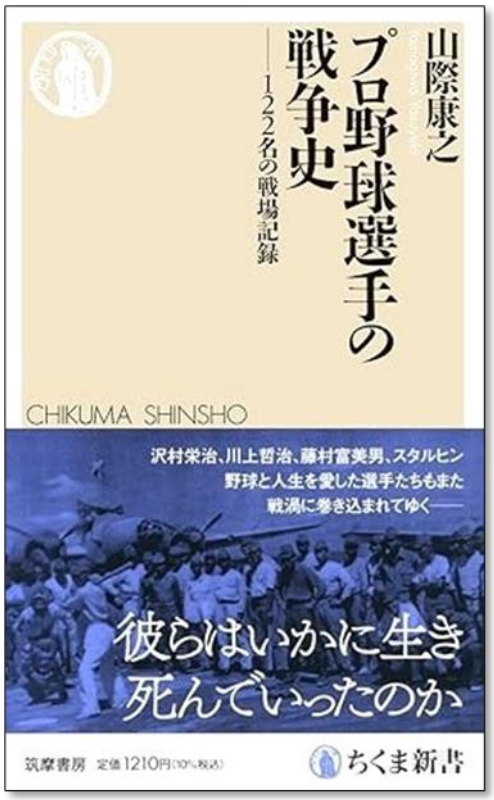
後藤正：名古屋軍、立命館大卒、内野手。1936 年入団の翌年、平壌の第 77 歩兵連隊に入営し、日中戦争が始まると直ぐに現地に急行。盧溝橋事件から約3週間後に盧溝橋から15kmほどの南苑の戦闘で戦死している。

中尾長：セネタース、明治大卒、外野手。1937年に入団したが試合に出場することなく出征。同年9月、河北省高地の山岳戦に投入され突撃の際に戦死。選手登録後わずか2ヶ月足らずの死だった。

東京に初空襲があったのは1942年（昭和17年）4月18日。航空母艦ホーネットからB25が16機飛び立ち、13機が東京へ、3機が名古屋、神戸に飛来している。この日、後楽園球場では黒鷲軍対巨人軍の試合が予定されていて、審判の準備をしていたのは前述の島秀之助だった。2・26 事件に遭遇し、そして東京初空襲にも遭遇している。この空襲で死者39名、家屋焼失は61棟とあり、東部軍司令部は、ラジオを通じて9機撃墜したと発表している。だが誰も目撃した者はなく、眉つばものだと感じる人も少なくなかったようだ。世間からは「落としたのは 9 機じゃなくて空気だ」と皮肉交じりに囁かれたという。しかも東部軍司令部が許可して新聞に掲載された高射砲に逃げ惑う敵機の写真も実は日本の海軍機であったようだ。

戦争に翻弄された選手たち
平和だからこそ楽しめる野球

戦没野球選手ではプロ野球出身者が 76 名となっている。アマチュア選手（早、慶、明大など）も多数出ている。紙面の関係で多くは書けないが、特攻として出撃し戦死した選手もいた。多くの野球選手の人生を翻弄した戦争に強い憤りを感じる。



終戦後わずか三ヶ月余りでプロ野球は復活し、ミスタータイガースと言われた藤村富美男や阪急の丸尾千年次（ちとじ）らは生きてかつての仲間と一緒にプレー出来たことが何よりも嬉しかったと言っている。

平和であればこそ自由に野球が出来、観戦も出来る。思いを新たにこれからもプロ野球を応援していこう。